

イタリアの音楽科教育におけるカリキュラムと実践における一考察

～歌唱指導の系統性に視点を置いて～

A Study in the Curriculum and Classroom Practice of the Italian Music Education

～From the point of the Systematic singing guidance～

瀧明 知恵子
Chieko Takiaki

キーワード：音楽科教育、カリキュラム、歌唱、発声法、学校教育、比較研究

1. はじめに

歌を歌うことから言葉ははじまったと言われている。歌い合うことで仲よくなれる、つまりコミュニケーションの基礎とも言えるのである。児童・生徒たちに豊かな音楽活動を体験させることは、人間形成に欠かせない。音楽は一生の友となり、知れば知るほど楽しみが深くなるなど、生涯学習につながっていくのである。

次期学習指導要領の改訂に向けて準備が進められ、学力向上ということで英語・数学・理科が重視されている。人間教育の基盤であり、豊かな心の醸成を担う音楽をはじめとした芸術教育が、必修教科であり続けた意義を再確認したい。音楽科教育の重要性が忘れられることのないよう、音楽科改善の視点から、さらなる充実をめざさねばと考える。

次世代に生きる子供たちには「創造性をめぐる」や「コミュニケーションとICT」を重点課題とした教育が望まれている。具体的には、国立教育政策研究所が提案している「21世紀型能力」（米国）や、OECD（経済協力開発機構）の「キー・コンピテンシー」の視点から、基礎研究を行い、育成すべき資質や能力を音楽科教育でどのように育んでいくのか、明確にしていく時期である。

筆者自身は、2014年より3年間、イタリアの音楽科教育について調査研究してきた。イタリアでは教会で響きある声をいつも聴き、歌うことも多く、音楽が日ごろの環境に当たり前にある。すぐれた美術芸術作品に囲まれ、重厚で品があり、統一感のある建物、そして古きよきものを大切にしている心がある。

イタリア大使館から紹介を受け、ローマの幼・小・中学校の一体型学校であるピステッリ校への訪問、及びボローニャ大学、マルティーニ音楽院への訪問、研究調査を行ってきた。実地調査することができた内容を含め、イタリアにおける音楽科教育に焦点をあて、その実態を探り考察する。多くの文化遺産に包まれているイタリアの学校音楽科教育について研究を深め、日本の音楽科教育への示唆を導き出すことは意義深いことである。具体的には歌唱活動に注目した学校音楽科カリキュラムに注目し、日本で根付いてきたカリキュラムを、イタリアの教育から検討することで、より良い授業を創造する機会としていきたい。

カリキュラム研究では、さまざまな次元があることが明らかにされてきている。田中統治氏（2001）は、カリキュ

ラムには次の4つの次元があることを指摘している。¹⁾ ①制度化されたカリキュラム ②計画化されたカリキュラム ③実践化されたカリキュラム ④経験されたカリキュラムである。これらの4つの次元のカリキュラムを検証することを課題としたい。イタリアの音楽科教育について小中学校の連続性も含めた系統的な研究は少ない。本論文では歌唱指導の系統性に視点をおいて、カリキュラム内容と授業実践に焦点をあて、その特色を解明することから示唆を得る。

2. イタリアの学校教育と音楽科教育

(1) イタリアの音楽科教育の変遷

先行研究を手がかりにイタリアの音楽科教育課程の「歌唱」の誕生から現在までの歴史の変遷をたどり、国の目指す音楽科教育の方向性の移り変わりを明らかにすることにより、イタリアの特色を探る。

大野内は「歌唱」の誕生から現在まで、音楽科という教科の捉え方から4つの時代に分けている。²⁾

- ① 愛国の精神の育成という政治的目的への手段の時代 (1894年)
- ② 認知的内容が重要視される学問としての性質が強かった時代 (1923年・1934年)
- ③ 精神教育の手段の時代 (1945年・1955年・1963年)
- ④ 音楽は生活に密着したコミュニケーションツールとして考えられた時代 (2007年)
 - ① では、「歌唱」が教科として初めてプログラムに組み入れられている。中学校では1968年である。「歌唱」で扱う楽曲については「お祈りや賛歌」と示されている。
 - ② では、歌唱教育は芸術教育に含まれ、音楽の理論的な基礎を含むものとなる。精神的な訓練として理解するという考え方から音楽そのものを学ばせる考え方に変わり、教科としての音楽教育の始まりである。
 - ③ ではプログラムにおいて「歌唱」は教科として独立している。「歌は精神教育の1つである」と明示されており、歌唱活動を精神教育のための手段として捉えていることがわかる。1955年では音楽理論の記述は無くなり、歌唱についても具体的な記述は無い。子どもの個性の育成を教育の目的に考えている。
 - ④ では「幼児学校および第1過程の教育カリキュラムにおけるプログラム」という名称がつけられている。教科間の領域の横断的な学習を行うため<言語・芸術・表現領域><歴史・地理領域><数学・科学・技術領域>の3つにまとめて示している。個としての人間形成を行っていくことがプログラムの理念として述べられている。コミュニケーション媒体としての音楽を、言語として捉え、その音楽言語について、学年が上がるにしたがって、「基礎的要素の学習」から「基礎的構成要素の学習」、「重要な要素構成の学習」へと展開されていることがわかる。³⁾

(2) 日本とイタリアの教育制度

教育制度	日 本	イ タ リ ア
学校制度	6—3—3—4	5・3・5*・3* *専攻によっては修学年数が必ずしも上記の通りとは限らない。
学期制度	主に3学期制	2学期制
年度	4月～3月	9月～6月

義務教育期間	小・中学校9年	小・中学校10年
教育委員会・教育担当 行政機関等の名称	文部科学省 各都道府県教育委員会	教育・大学・研究省（初等～中等教育管轄部－旧教育省） （高等教育管轄部－旧「大学・研究省」）
義務教育	小学校6年 6歳～12歳 中学校3年 12歳～15歳	初等学校5年：6歳～11歳 前期中等学校3年：11歳～14歳 後期中等学校4～5年のうち最初の2年が義務教育：14歳～16歳

イタリアでは教育体系は大きく2つの課程（サイクル）に分けられており、第1課程には初等学校（Scuola Primaria、5年）と前期中等学校（Scuola Secondaria di Primo Grado、中等学校相当、3年）が、第2課程には後期中等学校（Scuola Secondaria di Secondo Grado、高等学校相当、4～5年）が属している。なお、第2課程の後期中等学校には、文系／理系普通高校、芸術高校、技術学校（専門養成学校）等があり、専攻体系により修学年数が異なる。第1課程は全課程を通じて義務教育、第2課程については最初の2年が義務教育として定められている。ただし、教育権保護の観点から、「権利・義務」教育という拡大概念が論じられるようになってきており、全ての児童・学生が18歳までに卒業・修了等の資格を得られるよう広く教育の機会均等化を図ることが指針とされている。⁴⁾

（3）音楽科教育カリキュラム

イタリアでは日本の学習指導要領に相当するものとして、教育省による「幼児教育と初等教育のための国のカリキュラム指針」（幼稚園、小学校、中学校）がある。このカリキュラム指針を基盤とした教育がなされているが、学校の裁量の幅が大きくなっている。本指針においては、EUの「キー・コンピテンシー」をそのまま採用している。

「幼児教育と初等教育のための国のカリキュラム指針」 2012年9月版 教育省⁵⁾

文化、学校、人

- ・新たな局面における学校
- ・一人一人の中心性
- ・新たなシチズンシップのために
- ・新たなヒューマニズムのために

一般目的

- ・学校、憲法、ヨーロッパ
- ・生徒のプロフィール（修了時に到達していることが望ましい生徒像）

カリキュラムのオーガナイズ

- ・指針からカリキュラムへ
- ・領域と各教科
- ・カリキュラムの継続と統一性
- ・諸能力の発達のための中間目標
- ・学びの諸目的
- ・評価
- ・諸能力の認定

- ・みんなの、そして一人一人の学校

教育コミュニティ、専門的コミュニティ、シチズンシップ

初等教育段階の学校

- ・教育体験の意義
- ・基本的な読み書きの初等教育
- ・憲法とシチズンシップ
- ・学習環境

各学校はこのカリキュラムをベースに運営するが、それ以外に学校自身のカリキュラム（Piani di Offerta Formativa 「育成提供プラン」：音楽、演劇、運動活動など）を製作することで、カリキュラムをより豊かにし、特徴を加えている。イタリアのカリキュラム指針には、育成される基礎能力を明確に定義づけ、それを実践へと展開する一貫した理念が示されている。

音楽科の理念としては「人間の経験の基礎であり普遍的要素を成す音楽は、協力性や社会性促進へのきっかけ、楽器知識の習得、創造性と共有能力の発揮、コミュニティに属する感覚の発展、さらには異なる文化間の相互作用にも適しており、象徴的な位置を占めている。」⁶⁾ とし、人間形成において普遍的要素を成す、と明示している。具体的には音楽教育の修得は、実技と理論から構成され、学校教育においては二つの側面を持っている。1つは「合唱や演奏など、音を用いた作品製作」であり、もう一つは、「関連するイベント、現代や過去の作品を通じて、個人的、社会的、文化的意義の構成的意識的な享受を促す。」である。そして「歌唱、楽器演奏、創造的製作、聴くこと、理解や評論的熟考は、各々の音楽性の発展を促し、パーソナリティの感知－動力要素、認知要素、感情的－社会的要素の融合を助ける。また、困難を事前に防ぐことを可能にする精神身体的健康に貢献し、年齢によって変化する要求、希望、疑問、特徴に応じていく。特に、皆で音楽を学ぶという経験を通して、各自が楽譜を読み書きすることが可能になり、またその時に思いついた行動と思考をもとに即興で音楽を作ることができる。」と記されており、表現やコミュニケーションのための手段として、音楽は常に他の芸術と相互に影響し合い、全ての分野における学識との相互影響を大切にすることとして締めくくっている。

さらに、カリキュラム指針に示された具体的な指導内容、何を教え、どういった学力を身に付けさせるのかを知るために〈学習修得目標〉⁷⁾を見ていく必要がある。

初等学校5年修了時の学習修得目標においては、次のように示されている。

- ① 創作力と即興力を少しずつ伸ばすとともに、声、楽器、新しい音楽テクノロジーを創造的、意識的に使う
- ② イントネーション、表現、演出面に留意しながらグループや、一人で歌や楽曲を奏でる（多声音楽も含む）
- ③ 様々な分野やスタイルの音楽の機能面や芸術面を評価し、その文化、時代、背景を識別する
- ④ 様々な起源、ジャンルの音楽を構成する基本要素である音楽言語を識別し、分類する
- ⑤ 音楽記号を読み取り、楽曲の基本要素を表現する
- ⑥ マルチメディア（映画、テレビ、コンピュータ）における音楽や音の用途、役割、背景を読み取る

そして、前期中学校3年修了時の学習修得目標においては以下の記載となっている。小中学校の連続性を踏まえて系統的な指導を促していると言える。

- ① 個人、グループで、電子楽器を用いて、様々なジャンルやスタイルの声楽や楽器を表現豊かに奏でる
- ② 自由な構造、シンプルなりズム－メロディ規則を用いて、声楽や音楽を即興、修正、作曲する

- ③ 音楽言語の重要な構成要素を識別し、様式別に分類する
- ④ 音楽芸術作品を認識し、描写し、解釈する。そしてダンス、演劇、視覚芸術、マルチメディアなど他分野の芸術と融合したイベントを企画、実行する
- ⑤ 伝統的な音符やその他の表現システムを解説し、活用する
- ⑥ 曲の特徴の構成を見極め、その視野を広げる
- ⑦ インターネット上の音楽表現手段に触れ、専門ソフトウェアを用いて作曲する

(3) 能力レベル証明書⁸⁾

「能力レベル証明書」は2015年から試験的に導入され、2016年度にはイタリア全土の国立校において実施される。これは修了試験ではなく、小学校と中学校各修了時に渡される能力レベル証明書となる。Ermenegildo Pistelli Prof. ssa Brunella Maiolini (ピステッリ国立学校 ブルネッラ・マイオリーニ校長) より説明を受け、資料としていただくこととなった。

各教科の小5、中3の達成目標における評価を、国家試験の前に学校で実施することになったのである。10段階での成績表とは異なり、A～Dレベルで評価される。中学校の場合は最終試験終了後に配られるが、能力証明書自体は試験前に既に用意されている。小学校から中学校までの評価規準が一貫しており、全国一律の評価規準があり、国家資格のような意味合いをもっている。表現や鑑賞のみならず、社会、人間、生活における音楽を包括的な視野で思考することが要求されているのである。

やはり、系統性を持たせた能力の育成を基盤として作成されている。

紙面の都合上、ここでは、中学校修了時における能力証明書のみを取り上げる。原本を元に訳出しし、音楽科教育に関わる項目を抽出したものを作成した。

まず、評価基準は以下のように示されている。

- ① レベルA—上級レベル 生徒は習得した知識を活用しながら難題を問題なく解き、責任を持って意見を提案することができる。
- ② レベルB—中級レベル 生徒は習得した知識を活用しながら、新しい状況においても課題を解くことができる。
- ③ レベルC—基本レベル 生徒は新しい状況においても簡単な課題を解き、基本的知識や能力を習得したことを示しながら、基本的ルールや習得能力を適応することができる。
- ④ レベルD—初級レベル 生徒は指導のもとに簡単な課題を解くことができる。

校長は3年生修了時の最終成績決議、生徒の学習行程、プロフィールをもとに、 生徒名()、出身地()、生年月日()が、()年～()年まで()クラスに週() 時間通学し、以下同様の能力レベルに達したことをここに証明する。				
	能力観点	鍵となる能力	関連科目	評価
4	データや情報の収集と分析のため、調べて照合する必要がある情報の中から確かなものを見分けるため、そして世の中の様々な状況に対応するためにコミュニケーションテクノロジーを自覚的に用いる。	デジタル能力	全教科	

5	好奇心と感覚の探究を表現しながら、空間と時の感覚を身に付ける。背景、事実、現象、芸術作品を観察し解釈する。	学び方を学ぶ	全教科、特にイタリア語、歴史、地理、美術、音楽	
6	知識と基本的概念をベースとして持ちながら、新たな情報を手早く入手し、自主的に新しい物事を習得するよう努める。	学び方を学ぶ	全教科	
8	持っている可能性と才能を活かしながら体育、芸術、音楽など、合った分野において自己表現することができる。	自覚と文化的表現力	全教科、特に体育、美術、音楽	
9	独創性と発案精神を示す。自身で責任を取る。困難な場では助けを求め、また助けを求めている人には手を差し伸べる。自己判断をし、新しい出来事や予期せぬ事に対応できる。	発案精神と事業活動、社会性	全教科	
10	自身の可能性と限界の自覚。自覚的に物事を選択する。一人で、または共同で始めた作業を成し遂げる努力をする。	学び方を学ぶ社会性	全教科	
11	共有するルールを守る。個人的経験と感性を引き出しながら、他人と協力して共通の利益を築く。	社会性	全教科	
12	加えて生徒は学校内活動、また校外において次のような意義深い能力を示した：			
習得した各能力レベルをもとに、クラス議会は生徒に学問において次の進路へ進む事を薦める：				
日付： 校長先生のサイン				

4. イタリア（ローマ）における音楽科授業の実践事例

(1) ピステッリ小学校の実践の概要

(Scuola Primaria "Ermenegildo Pistelli" Monte Zebio 33, Roma)

ピステッリ国立学校（幼・小学校の一体型学校）は、小学校40クラス、幼稚園7クラス、生徒数計1055人から成り、敷地は離れているが、系列校の中学校・高等学校もある総合学校である。隣の敷地には地域の中学校・高等学校があり学校の施設や設備を共有している。これは予算面での措置のようである。

イタリアでは、音楽の授業は中学校では必修だが、小学校は必修ではなく、各学校の裁量に任されている。本学校では音楽活動の重要性を鑑み、音楽専科の教諭を置いている。

本学校でのカリキュラムでは、音楽は週1時間であり、歴史、文化、基礎基本事項など、音楽全般の説明を行う。また、発声・歌唱など音程を身に付けられるよう指導している。他の学校では基本的に音楽の専門の資格を持つ者が必ずしもいるわけではなく、一般の教員が音楽指導する。特定の力をつけたい場合は、各家庭でさまざまな楽器などの個人レッスンを受けるのである。

本論で紹介する実践は小学校2年、4年、5年の3事例であり、それぞれ、1時間（時間設定はかなりアトラダムである）の記録によるものである。各実践の内容、及び特色を述べていく。

(2) 授業実践とその特色

実践1： ICT教材を活用し、リズム・メロディーに合わせ3か国語の発音に親しむ

小学校2年生の音楽授業で、指導者は Cristina D'Amico (クリスティーナ・ダミーコ先生) である。

基本的には、クラス人数は23・24名だが、本学校は16名である。特別支援担当は1名であり、特別支援クラスはなく、普通学級で共に学ぶ。各教室は狭く、動き回りにくい。音楽室の設置はなく、必要に応じて多目的教室（ピアノ設置）を順番で使用する。

ICT教材（パナソニック・ソニー）⁹⁾ を活用し、イタリア語、スペイン語、英語の発音を映像と音楽に合わせて発音する。ダミーコ先生は4年前から活用している。ICT教材は興味を持ってよく見て聴いているが、より興味を持つ声かけや、場面によってボリュームをあげたり、といった工夫がみられた。

以下のような順序で授業が行われた。

- ① ICT教材を活用し、映像と音楽に合わせて、母音練習（A E I O U）を行う。
- ② スペイン語の歌を流し、母音を見分ける。「ぬいぐるみ」など単語を発音し、スペイン語の歌を音楽に合わせて歌う。リズムに合わせて手拍子させる。
- ③ リズムをとらえさせる。手をたたきましょう、リズムをしっかりとらえましょう、などの声かけを行う。
- ④ 英語の単語の読み方、意味をあてさせながら、英語の歌と一緒に歌わせる。「りんご」など、単語を次々に発音させる。音符のルールを合わせて指導する。

本学校では、1コマ1時間前後の授業であり、内容によって、ふくらませて学習させ、時間はアトランダムに行っている。日本のように45分といった区切りはない。

「日本では教科を分けて学習していると聞いているが、イタリアでは当たり前音楽があり、他の教科でも使われている。各教科で音楽を入れた活動がある。」とのことであった。本授業においても、音楽の基本的な活動をはじめとし、母音の発音、イタリア語・スペイン語・英語の単語の発音をゲーム感覚で身につけさせていた。単語の意味にもおおよび、バイリンガルの能力を自然に身につけさせている。

ダミーコ先生は、どのクラスも同じカリキュラムでできるようローテーションを組むなど、音楽の授業のコーディネートを行なっている。

実践2：リズムと旋律

小学校3年生の音楽授業で、指導者は Cristina D'Amico (クリスティーナ・ダミーコ先生) である。以下のような順序で授業が行われた。

- ① 既習の曲を元気に楽しく歌う。「息をお腹から押し上げて声を出そう」といった指導を入れ、仲間と一緒に歌い合わせることを楽しむ。
- ② リズム指導として、3拍子で3つのパターンのリズムを列ごとに練習する。1グループは基本リズムで机をたたき、2グループは他のリズムで手拍子、3グループは足をならす
- ③ 交代で行ったり、同時におこなったりする。リズムを体全体で感じとらせる。
- ④ リズム遊びしながら歌を歌う。注意深く聴く耳を育てるため、集中して行わせている。
- ⑤ ゲーム感覚で先生の方を向き、目隠し、クラスの仲間が普段とは違った声が発する。発した相手をあてさせる。裏声を出したり動物の鳴きまねをし、あてられないようする。注意深く聴き、声の主を言い当てる。当たった人が、交代する。

⑥ 再び、歌いながらリズム打ち手拍子、机を使って、リズム遊び。

特色として、歌唱面では教師の声、仲間の声、CDによる専門家の声など、注意深く「聴く」ことに力を入れ、良い声づくりとともに音感をつけようとしている。⑤のゲームは昔から音に対する集中力を付けさせる目的で行われているという。発声指導においては、日本で行われているような指導法であるが、腹式呼吸を意識させる「お腹から息を押し上げて」や「喉を広げて」など、イタリアで伝統的に行われている指導が要所所で見られた。

実践3：「転入生を迎える心を育む」道徳と音楽

小学校5年生の道徳の授業で、指導者はフェデリカ・ヴィセンティーニ先生（担任）・ヴィルジニア・ロンバルディ先生（5年生道徳担当教師）以下のような順序で授業が行われた。

- ① 歓迎の歌「ハッピー」等を歌う。
- ② 幸せをテーマに意見交流
- ③ 紹介された本「おおかみの月」を各自が読み、友情の価値や大切さ、忍耐力について作文を書く。
- ④ 自分の感想や意見を発表する。友情の価値や大切さ、忍耐力を学ぶ。
- ⑤ 転入生の現在の思いを発表させる。
- ⑥ 最後に再び歓迎の歌「ハッピー」を思いを込めて歌い幸せを共有する。

発表では、どの子供も自分の言葉ではっきりと、しっかり話せる。堂々とした話し方に驚かされる。イタリア語自身が発音が明瞭ということもあるが、言葉の力を感じた。最後に転入生2名が非常に浪々と意見を述べた。「みんなに受け入れられたことを感じた。まさしく、このクラスは私のクラスだ」「僕が感じたことは、イギリスへ転校し、また帰ってくるようになったが、何も変わっていないこと、家に帰ってきたようだ」大変印象的な発言であった。この取り組みの中で音楽を通して幸せを共有するというで歌い合う機会を要所所でつくっている。他に、「平和」をテーマに平和のメロディーを作り、5線譜に音符を皆でいれ、掲示物をつくるなど、音楽を入れた取り組みが様々なテーマで行われている。

5. 考察とまとめ

本論文では、イタリアの音楽科教育における歌唱指導の系統性に視点を置いて、カリキュラム内容と授業実践に焦点をあて、研究を進め、次のことが明らかになっている。

カリキュラムにおいて、日本では総括目標は音楽的側面からの目標が設定されているが、イタリアでは音楽を「人間教育の基礎であり普遍的要素を成す」と明確に示しており、協力性や社会性を促進させ、創造性と共有能力の発揮など人間教育の基盤となることを示している。そして、「能力レベル証明書」から読み取れるように、表現や鑑賞のみならず、社会、人間、生活における音楽を包括的な視野で思考することが要求されている。

領域について、日本は「表現」と「鑑賞」の2領域であり「楽しむこと」といった情意的内容を重視しているが、イタリアは「生活と音楽との関わり」が中心となっており、「演奏・鑑賞・音楽理論・コンピュータ」などの活動において、音楽と生活の関わりに視点を置いている。

また、日本では「表現領域」において学年ごとに「共通教材」が提示されているが、イタリアでは、有名な歌曲やオペラの音楽など音楽的に重要な楽曲を使用し演奏活動や鑑賞活動に絡め、関連させながら学習を進めている。歌唱をはじめとする音楽表現の基礎基本指導については、昔ながらの指導法が引き継がれ、低学年から、例えば腹式呼吸を意識させる声かけや「音に集中する。よく聴く」という指導を、繰り返し行っている。

示唆としては、イタリアの音楽科の理念にみられる音楽科の位置付けが挙げられる。音楽科が協力性や社会性を促進させ、創造的な人材育成に貢献する教科という位置づけが明確に示されている点であると言える。そして、音楽の基礎的能力の在り方や、学習活動への展開も明示している。

また、「生活と音楽との関わり」が重視されていることである。演奏や鑑賞、音楽理論、コンピュータの活動において、音楽と生活の関わりに視点を置いているのである。

以上の事柄がカリキュラム内容と授業実践から読み取れることであり、今後も研究を深めていきたいところである。今回はスピテリ小学校での授業を参観し検証したが、様々な学校でカリキュラムがいかに実践されたかを捉えて、初めてそのカリキュラムの成否は検証されるのである。学校現場で、どのように計画され、実行されているのか今後の研究につなげていきたい。

歴史的に音楽文化の中心であり、コンセルバトルなど充実しており、学校教育での目的は音楽そのものを教育することではなくてきているのであろうが、現実では音楽をより学び親しむことができるのは、一部の人々である。一般的には学校や地域で音楽活動を楽しんでいるのであり、すべての子ども達に音楽の基礎基本教育は学校で行って欲しいという思いがある。¹⁰⁾ イタリアの歌唱指導をはじめとする、引き継がれてきた指導法や創意工夫に学び、発達段階に応じ、正しく表現する方法である呼吸法や発声法など基礎技能の教育方法の検証を深めたいと考える。

音楽科は学力や人材育成といった観点からは、その意義と役割が見えづらい。イタリアでは音楽教育の理念として「人が人となるための基礎基本としての芸術教育」と明記されている。梶田叡一氏が、「現在の教育で決定的に不足している人間の成長の面を重視していくこと」の大切さを述べるとともに、人間教育の総合的な目標の中に「成長発達の問題点である感性の未発達において」¹¹⁾を指摘しているように、日本においても人間教育の基盤を支える教育の一端を担う大切な教科であることを再確認したい。

ベルカント唱法の発祥地であり、脈々と受け継がれている音楽文化に満たされ、専門教育機関としての音楽院などが充実しているイタリアではあるが、現在の公的音楽教育環境は決して良いとはいえない。小学校では音楽の専門の資格を持つ者が必ずしも在籍するわけではなく、一般の教員が音楽指導する。一方、小学校教員採用試験に音楽実技は無く、大学の教職のカリキュラムにも音楽は含まれていないことが多い。学校現場ではICTを活用し様々な教科（英語・国語・体育・道徳など）と音楽を融合させた授業や、総合的な表現力の向上を目指す音楽科を核とした合唱劇のプロジェクト（総合表現活動）、地域の音楽文化やアウトリーチを取り入れた授業など、創意工夫を重ねている。そういった中で、示唆を導き出し、日本で不足している面を補い、日本の子どもに適した形で取り入れた新しい音楽の授業開発を行っていきたい。これらの実践研究から、教育改革が進められている中で、創造性とイノベーションを育む音楽科カリキュラムの開発を支援していきたいと考える。音楽の世界を幅広く考えていくと、音楽科教育は、新しい時代の協調的な学習やコミュニケーション能力を養うなどに適していると言える。

日本の秩序だった音楽科教育を縦軸に、イタリアの独創的で創造的な活動を広げ深める活動を横軸と捉え、両国の特徴を融合させた新しい音楽科のカリキュラムの研究を深めていければと考える。

引用・参考文献

- 1) 田中統治「学校に基礎をおくカリキュラムづくりの視点と方法」学校運営 43(6), 6-11, 2001-09 学校運営研究会 2001
- 2) 大野内 愛「イタリアの小・中学校における音楽科教育の変遷 -1894年から現在までのプログラムに着目し

- て-」 広島大学大学院教育学研究科紀要 第2部 第61号 2012 333-342
- 3) 大野内 愛「1920年代のイタリアにおける小学校唱歌教育の特質-「1923年のプログラム」と小学校歌唱指導者(1924)の分析をとおして-」『音楽表現学』vol.9 日本音楽表現学会 2011, p.57
- 4) 外務省 諸外国・地域の学校情報 国・地域の詳細情報(平成28年1月更新情報)
Wikipedia イタリアの学校制度(最終更新 2017年4月13日)
- 5) 「幼児教育と初等教育のための国のカリキュラム指針」2012年9月版 教育省
- 6) 同上
- 7) 同上
- 8) 「SCHEDE DI CERTIFICAZIONEDELLE COMPEETENZE」Istituzione scolastica
- 9) ICT パナソニック教材
「LaMia Citta」(音楽を聴きながら自転車に乗るルール)
「LE PAROLE DEL CORPO」(音楽を使って身体と空間を遊ぶ)
「IL CORPO E LO SPAZIO」(4・5年楽器うた)
「BARATTORO」(母音子音を見分けさせる。)
- 10) 瀧明知恵子「イタリアの学校音楽科教育に学ぶⅡ～創造性・主体性の育みを視点として～」教育フォーラム58号特集<主体的能動的な学習-アクティブラーニングの精神を生かす>金子書房 2016
- 11) 梶田叡一「人間的な教育とは何か」教育フォーラム第4号
- ・ 梶田叡一「生きる力の人間教育を」金子書房 1997
- ・ 大野内 愛「1920年代のイタリアにおける小学校唱歌教育の特質-「1923年のプログラム」と小学校歌唱指導者(1924)の分析をとおして-」『音楽表現学』vol.9 日本音楽表現学会 2011
- ・ 高橋春菜「イタリア公教育における学校外教育の位置付けの変容」-1985年版と2012年版国の指針の内容分析からEUの影響に着目して-
東北大学大学院教育学研究科研究年報第63週・第1号(2014)
- ・ 瀧明知恵子「イタリアの学校音楽科教育に学ぶⅠ ~歌唱活動に注目して~教育フォーラム56号特集
アクティブラーニングとは何か>金子書房 2015
- ・ 瀧明知恵子「イタリアの学校音楽科教育に学ぶⅡ～創造性・主体性の育みを視点として～」教育フォーラム58号
特集<主体的能動的な学習-アクティブラーニングの精神を生かす>金子書房 2016
- ・ 瀧明知恵子「イタリアの道德教育と学習者の評価 ~イタリアの学校教育実地調査から~」指導と評価 2015
図書文化
- ・ 「音楽科カリキュラムと授業実践の国際比較」日本学校音楽教育実践学会
音楽之友社 Richard Jones p.184 2012